

「心」はフロイトがE語を公開し、自分語りを続け、一方でテレビでプライベートを告白する。「心」や「内面」が、外部にさらされている。フランスの精神分析家ジャック・ラカン(1901-81年)研究の第一人者、京都大人文科学研究所准教授の立木康介さんは、現代を「露出する心の時代」ととらえ、可視化される「心」、モノ化する「心」の精神病理に問いを投げかける。(河村 亮)

京都大人文研准教授

立木康介さん



精神分析家は精神分析を受けなければならない。今も、年に2回はフランスで分析を受ける。「分析家になるためのトレーニング」でもあり、自分自身を分かったいんです」と語る立木康介さん(京都市左京区・京都大)

モザイク 新世紀

学に挑む

露出する「心」の病理問う

中で最後に残っていたのは、人間の内面。そこに投資を始めるという。私的領域を公開し合う時代は、大規模な集団的暗示が働きやすい。内面が可視化され、ひとかたまりとして一律にコントロールされる。「突出した論点が他をのみ込んで肥大化する傾向とも無関係ではない」その根源は何か。抑圧が働かない世の中になっっているからだ、という。「タブーがなくなり、抑圧が機能しないと、自

抑圧不在の世界 思考も詩も平板に

らの享楽を見せびらかす傾向になる。抑圧とは我慢するシステム。現実では、快楽の追求を一旦中断して満足に至る経路を頭の中で組み立て、折り合いを付けなければならぬ。それが思考だ。抑圧がない。それが時代には思考もない。それはどこに向かうのだろう。「ラカンは、抑圧について、あることを言わない代わりに別の表現をすること、とした。言われなかったことが影になり、それが無意識となる。抑圧の不在は、別のことを言う表現をできなくした。それがボエジー(詩)の衰退、アートの表現の喪失につながっているのではないか」。メタファー(隠喩)がなくなり、言語の平板化、心の平板化をもたらすという。

その後、フランスへ留学した。もともと研究者になるつもりはなく、「社会に出て何をしたいかわからなくなつた。そこから逃げてフランスまで行ってしまった」。そこで社会実践としてのラカンと出合い直し、精神分析の世界へ導かれた。

今、関心に向けるのは、精神分析が乗り越えようとした宗教だ。「人間は脱宗教でできるのか。サッカーW杯の熱狂や、ミサのようなマドンナのライブ、聖地巡礼する美少女キャラのオタクたち。実は宗教的情熱が形を変えて、われわれを取り囲んでいるのではないか」

ラカンと出会ったのは大学時代だ。「人間は言語の外には出られない」というラカンの基本的な考えになじんだ。「言葉をしゃべる前に生きて



ついき・こうすけ 1968年、神奈川県生まれ。京都大大学院教育学研究科修士課程修了。フランスへ4年間留学。パリ第8大学精神分析学博士。98年、京都大大学院人間・

環境学研究科助手、2007年から現職。専門は精神分析的知の解析と展開。主著に「精神分析と現実界 フロイト/ラカンの根本問題」など。